地理纂考

哈四種郡

十五

1249
和書門
類 二三八八九號
一二〇函
一一架
二八冊

內閣文庫
和書
類 二三八八九
號 冊
函 一二〇
架 一一
冊 二八

內閣文庫
番號 和 22889
冊數 28 (15)
函號 176 151

内一一八六六號

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

地理纂考十五之卷目録

大隅國姶羅郡

帖佐郷

上別府川　住吉池
霧島神社　納屋市
稲荷神社　菅原神社
甑神社　三宝荒神社
米山　平山城
古帖佐屋敷跡　建昌城
平松神社　朝鮮王子事跡
住吉神社　萩峰城
八幡神社　帖佐北船戦
愛宕神社　義弘治所
滕跪騎馬冢

内一一〇六六號

新城　古城　茶臼城

同郡

重富郷

白銀山　白銀坂　脇元濱

布引瀑布　岩叡神社　諏方神社

稲年禮神社　岩叡城　平松城

狩集陣営　惣陣鹿倉山　諏方ヶ城

上九王神社　下九王神社　渡瀬川

高姫神社　船津川

同郡

蒲生郷

真黒岳　前川　後川

中山瀑布　廣瀑布　左簸瀑布　青色野瀑布

若宮神社附四所宮祭神　仁德天皇　宇治皇子

宇禮姫　久禮姫　武内社　武内宿祢　早風社

火闌降命　天ッ社　國ッ社　大玉社　菜畑両社

大多羅知女　聖德太子

楠田神社　蒲生城　荒平

尼ヶ城　北村城　菱刈寨

切手園付遠江墨丘射場　第子九播磨墓

同郡　山田郷

鉢乃峰　山田川　黒嶌神社

玉城山　松坂城　野神牧址

地埋纂考十五之巻

姶羅郡

帖佐郷

鹿兒嶌縣廳と距ること子方五里うり亥の方山田と接し酉の方蒲生卯の方加治木未申の方重富と接し周廻五里余村落拾一　東鈗田村　三十町村　鍋倉村　豊留村　西鈗田村　中津野村　深水村　増田村　市師村　住吉村　永瀬村　村　高九千九百拾五石三斗八舛九合餘士族千八百拾五人男千十四人女八百一人卒九拾九人男五十人女四十九人平民三千五百七拾三人男千八百四十二人女千五百三十一人人員總計五千四百八拾七人戸數千百六拾四軒

内一一〇六六號

上別府川　上流ハ蒲生より來て重富帖佐の境を過ぎ中
津野村内なる山田川合流し重富船津村と邑界又帖
佐三十町村鍋倉村餅田村を歴て當郷と加治木との境
界紀海に入る川幅一町許水勢大にして通路船渡か
ら海口より上流一里許舟船往來を

住吉村

住吉池　周廻二十町許深さ計ること西北方十分の
三々蒲生に爲て池水ハ當村及び蒲生の田地に灌住吉
社に因て名を得たり鯉鮒多く産し

住吉神社

奉祀　摂津國住吉に同じ　正祭九月廿九日

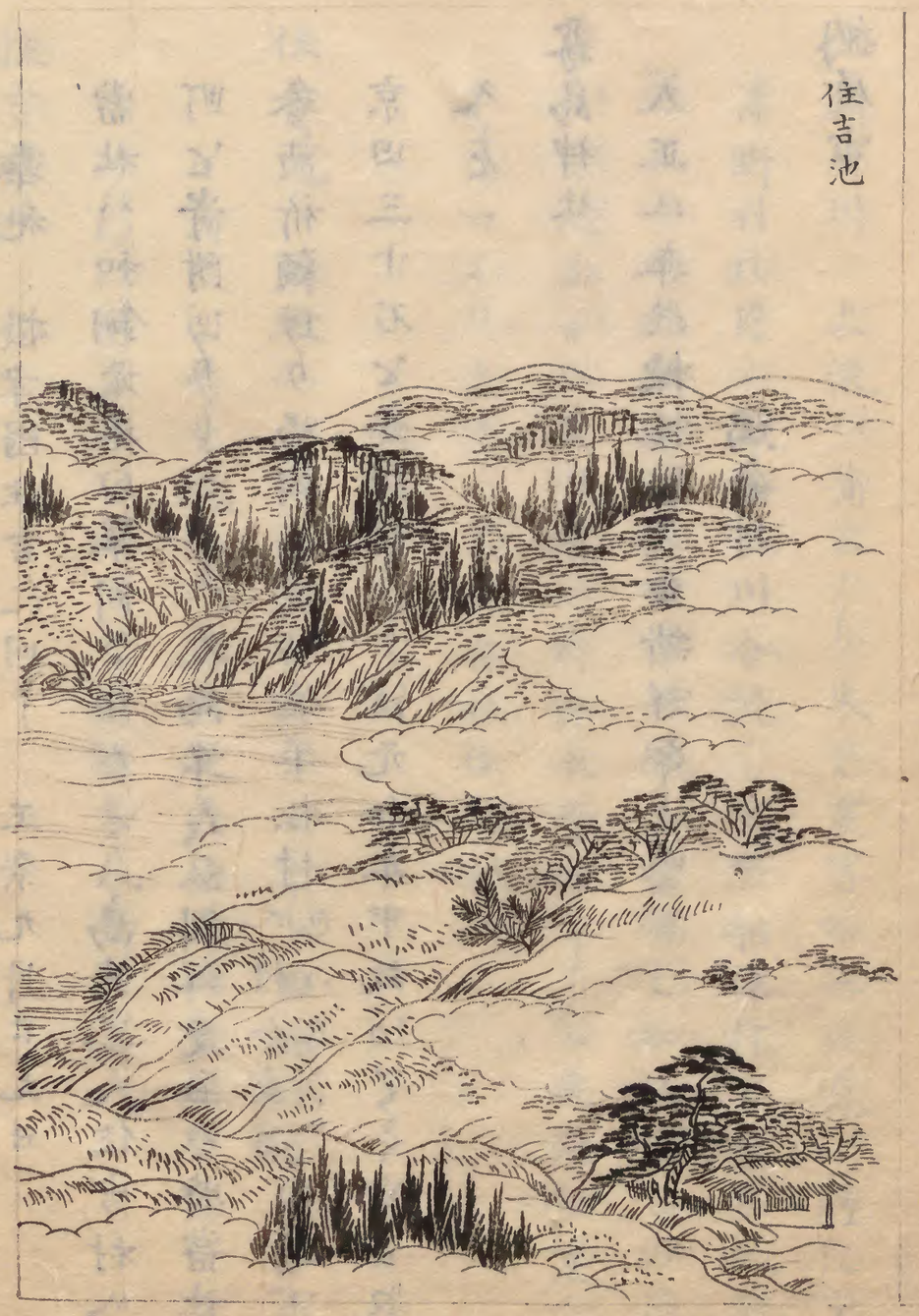
當社ハ和銅元年の草創なりと云ふ島津忠久住吉村ハ
町と寄附なりしと又島津義弘朝鮮渡海の時當社に
參詣祈願なり帰朝の後帖佐平松村此村今重富邑の内下の内
京田三十石を寄附なりし元和年中故なくして官に収
入せ

霧島神社

天正二年此棟札なり由緒詳なるべし

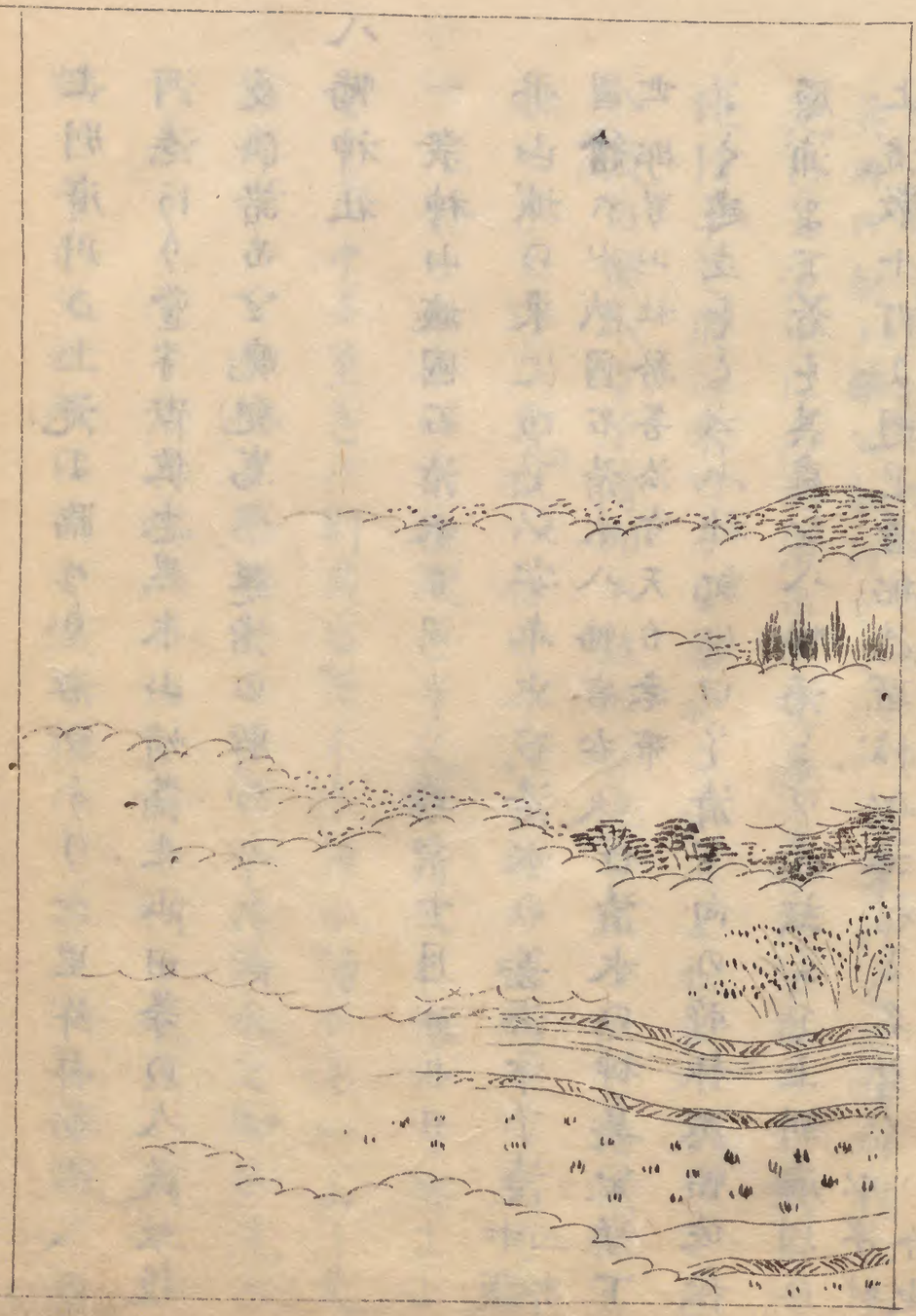
鍋倉村

納屋市



国立公文書館
National Archives of Japan

住吉神社



上別府川の上流に臨より海口より一里許舟船出入の河港にして萑年田佐志黒木山崎蒲生山田等の人民米穀及び諸品を鹿兒嶌へ運漕の所なり

八幡神社

祭神山城國石清水に同し　正祭十月廿五日

平山城の東にして弘安年中石清水の善法寺了清和漢三才圖繪云山城國石清水八幡宮在久世郡男山社務善法寺天台妻帯石清水の神炅を守下さく建立ありと云ふ社記に曰了清下向の時神輿帖佐松原浦に下着を其處を八幡港といふ茲より上別府川の上流數十町に遡り着船地所船津村と名付く船津村八今重

富に屬を其村に九王神社にして其時の船王■を勧請をとゝ又東北方三拾町村に大池にして池中に山急湧出を其邊に神輿を留めく鎮坐社地狹ト時に東の方に當後に山上に松樹八本にして急八流の幡樹に了清即チ鎮坐の地に定め松を幡樹松と称せしとにして其古松ハ枯く今社ハ後の植継こと也周圍一丈余の松今に二種残きり又了清彼の幡の奇瑞よりく山中に至きハ則其嵓隙より清水湧出といふ是後奇瑞して神德に感■をとにして今其清水を御手洗と云ふりくて了清其地小石垣を築き祠を建立し新正八幡と号以又社殿の西に城を構へく其名を平安城と云

正祭十月廿五日松原浦に神輿臨幸ありて是を濱殿下
と云ふ島津義弘當郷に在城の時特に尊敬ありて奉
納數品あり又關ヶ原征韓の役ふを立願ありく慶長六
年十月十五日寄進の品多し社記に見ゆ

稲荷神社　正祭十一月廿八日

島津義弘朝鮮の役に慶長三年十月朔日朋人新塞を攻
め火器を以て城を破んとせし其勢い甚急なり義弘兼て
稲荷の神に禱る時に赤白の二狐出現し明軍此中に馳
入る忽ち藥器に火移り黒煙空を蔽い明兵死傷數知
らず一時に明軍大に敗走せ時に一狐ハ矢に中りて死
せ即ち其屍を壺に納めて陣僧頼雄法印修驗佐竹光明
房に命じ是を守護して帖佐に帰らしむ此年十二月廿
八日平山城内葛尾に送埋し爾一社を立つ其後社地崩
て文政十年二月今此地に移せり故に是を高麗稲荷と
号し又戦死稲荷と云ふ二月初午に祭祀ありて世々島
津家敬禮し社司篠原駿河紀し爾(神階を)下部家に請もしめ文
政元年二月正一位をさけあらる

菅原神社　弘安年中筑前宰府に神霊を迎祭せしと云ふ
義弘當邑に帰りて時禮敬世の常からに朝鮮の役より
白蓮紫藤及び雉を携へ帰り社地北内に池を掘り白蓮

を植え紫藤を池に清め裁え雑ハ社頭に山に放ちあるを拾蓮と藤と今絶えなし社庭に義弘手自植置し松かりとて大樹なり

愛宕神社　神体義弘自作なして崇敬なりしを朝鮮帰朝に後邑内の徒一社を建立して安置すと云

甑神社　正平年中建立に棟札を納む祭神由緒傳ハらず

三室荒神社　義弘建立かりと云ふ祭神詳からず

膝跪駿馬冢　亀泉院旧地なり此に義弘常に是を愛し元亀三年木崎原に於て伊東義祐の兵と戰ひ大に是を破り草騎なし敗北るを逐ひ鬼塚原に至て敵の將柚木寄丹後馬を返し弓を引く義弘大に怒り呼て曰吾は島津兵庫頭かり其猛威神に如く仰き見るおと能ハず次丹後弓を捨て馬より下て伏す則ち鎗を揮ふて是を刺殺し又進んで敵士肥田木云爾を刺殺す甚時此馬前膝を折て義弘を使からしむ駿馬かる故是を呼て膝跪駿馬と称す牝馬は文安八十三歳に終ると云ふ一説に八加治木西別府村牧馬苑に産かりと云へり又一説民間の産かりとと云ふ又一説に義弘伊東ノ將伊東新十郎と鎗を合せ双方より相突なせし時前膝を折り敵の鎗義弘の兜に抜き義弘敵に面を賞き遂に討取ると云ふ

米山　此山富岡に上に古き堂宇を構へ薬師を安置せり登る凡二町許頂に平地一畝余にして眺望するに山

野より海上を至り數里ゝ間一幹の内に帰して風景佳
かを天禄年中怙佐六七と云へる壮士朝鮮の役を從ひ
行く時を此藥師を詣てゝ堂ゝ揮う詠歌を書置しを朝
鮮に於て虎狩の時虎ゝ牙をうゝを死を自筆ゝ書も
寛延二年十二月十二日堂宇火災に罹を焼失せしとき
其歌
命のらは又も来てこん出山の藥師の堂ゝ軒端のら
にか
此岡ゝ八分目を清泉巖隙より出つ此水を瘡瘡人を飲
しむもを軽安かりとて流行ゝ時を参詣の徒必を汲帰
る故を瘡瘡水と呼ふ
平山城（ヒラヤマノシロ） 本城又ハ内城とも称次東北も山續ゝ小高堀切
の内南ハ絶崖西ハ水田を隙むを水泉多し山上高さ二
町許本丸中丸平安城荒神城鶴丸城松尾城小城櫓城賀
茂城東城玄番城南城高尾城等ゝ名を分てり初め織橋
山と云ふ古へ大隅の國諸所に山城國石清水八幡の神
領ありしを弘安年中石清水善法寺了清下向して苗守
刑部左衛門尉用等を代を神領を掌を八幡社を此山に
建て社の西に當城を築き平安城と号して居城と次ゝ
くて了清平山村の領家職となり自ら平山と称し其子

孫世々當邑を領し第九代越後武豊の時より至り島津忠國屢平山を攻め享徳年中遂に是を平ぎ指宿に移し及び其一族を鹿児島武村に移して當邑を島津豊後季久忠國の弟なり與ふ既にして季久死生野城を築き是に移る第二子忠康をして當城を守らしむ忠康亦平山と号次忠康後松山を領す明應四年川上筑前忠直と帖佐迫川村此村今恰羅郡西田に屬す與ふ因て薩州と号す六月加治木領主加治木大和久平叛し夜に乘じて當城北南城を襲ひ取る川上忠直當城の高尾城に在て固く守る七月島津忠昌大兵を將ひて南城を攻む久平逃き帰る於是忠昌忠直の功を賞して帖佐地頭と次大永六年出水領主島津貫久叛す忠直是に憑し當邑新城を築き并に當城に據る十二月島津相模入道忠良國主島津勝久に告て兵を督し新城及び當城を攻む時に貫久の族島津善左衛門妥久援兵を領し來り城外に出て拒く忠良奮擊して妥久等を斬る猶進て新城を焼き忠直戦斬る城兵死せる者五百余人に及ぶ因て島津下野昌久就して地頭あらしめ忠良鹿児島に帰る勝久其功を賞し忠良に伊集院を與ふ七年四月昌久加治木北領主伊地知周防重貞と謀て叛く六月忠良又加治木城を攻拔き重貞を殺し又當城を拔き昌久を

殺次一日ゐして二地攻足む於是忠良伊地知民部重辰
をして地頭多らしめ重辰新城に入る（傳記曰大永の頃重辰帖佐新城の
地頭かり）享禄二年正月廿二日祁答院重武兵を発し當城及
び新城を偖る重辰戰死も其子小次郎ハ重辰北命ゐ同
ゐ五六人を率て吉田乃城ゑ遁る是後重武う子河内良
重迫二代帖佐を領も良重屢島津氏と戰ふ弘治元年正
月忠良嫡男島津貴久大軍を將ひて鹿児島を発し吉田
ゑ至る蒲生乃軍と戰ふ既ゐし ゐ三月廿七日島津右馬
忠將進ミて加治木岩野原ゑ屯し當城を攻むと次島津
左京衛尚久も別府川北南に陣も忠將輕率を指揮し城

ゑ鳥銃を発ちて戰を挑む城兵岩野原ゑ至る尚久其横ゥ
擊て牛の渡り（牛の渡ハ鍋倉村と餅田村北境にあり）を断つ忠將其前を擊
つ城兵敗走も諸將追て高尾城ゑ火を放ち尚久北軍遂
ゑ城門を破る首級斬る多百余級かり祁答院良重猶堅
く守を下らに諸將日夜是を攻む良重勢ひ霸る力尽き
四月二日北夜祁答院ゑ走る爰に於て鎌田刑部左衛門
政年を地頭として當城を守らしむ同年七月祁答院良
重又蒲生範清と共ゑ新城を襲ふ右馬忠將等當城より
至りて是を援い若干人を斬る敵散々ゑ敗走も
義弘治所　文禄四年島津義弘朝鮮より帰朝の至息島津

豪久を留て加徳島に軍を督さしむ六月豊太閤は伏見
に謁し七月栗野に帰る（旧記曰八月廿八日栗野に帰る
と所りさしとを八月三日義弘
豪久に遺る書簡に去月廿八日栗野
に至ると見えたれハ今おもきに寄り）十二月栗野より移
りて帖佐を治所とす義弘倹素を尚ひ豪作質朴なしと
土人に豪ひとし慶長元年正月十七日又伏見に至る
大閤謁す此秋朝鮮に和議敗れ復朝鮮國を征伐す十
月十日義弘帖佐に帰る再朝鮮に赴く同二年二月廿一
日帖佐を発し蒲生に次る此夜雨降孤火頻に暗きを照
に諸軍是を見て稲荷の神我が勝利を示すかとなす大
きに勇む果しなく新塞の大捷を得たり六月義弘朝鮮に
至り豪久に加徳島に會す朝鮮の役終る飯朝に後同五
年十月関ヶ原より帰る十二年十一月十三日加治木へ
轉る島津豊後久賀を帖佐の地頭ならしむ今居第の
跡凡六畝許りなり猶石垣残きり義弘朝鮮に役に如紀
處々に於て其武功許多かるといへとも新塞の大捷に
至りてハ明虜に首を斬る支三萬八千余是實に慶長三
年十月朔日なりて其威光異域に赫耀き明虜義弘の雄
畧に恐き夜又石曼子と称するに至る（林道春豊臣譜に
石曼子と称する夜を記す石曼子ハ敵人より夜又
明國に音なて島津といへる詞なり）是秋八月豊太閤伏
水城に薨し朝鮮渡海に軍兵都を帰朝を免れの遺命に

りしは京師に訛り傳へて明人太閤に薨去を聞き大軍
海上を遠望帰路絶えて日本の軍兵帰朝もる良能も次
と比説ありて人心安からず是は因て徳川家康公親ら
大軍を將て渡海し日本の兵を振旅を征夷の議を立つ
此時加賀利家病は羅をしら是を聞若し然らハ其跡内
難必も作らむ我代望て渡海し軍事を董もへしと云ふ
然きとも家康公聴もして関東より軍兵三萬余人を京
都は集む是に於て諸侯皆曰二公俱は出つ征藤
堂和泉守高虎ハ外虜の情は熟も因て高虎を遣し先つ
其事情を視も為しとかり家康公是は従い廼ち高虎を

渡海せしむ高虎名護屋は至も義弘新寨の大捷ありを
明軍大は恐き敢て出も日本は軍兵帰朝もる良難ら
にと聞き伏見は帰て是を報も家康公を始め心を安し
大は悦ふ既はして日本は軍兵悉かく悉を帰朝もかく
て諸將帰朝は時明將陳璘水軍を督して小西行長ら順
天城よりの帰路を遮も行長城を出る良ありとも征義弘
立花宗茂等と議して行長帰朝を得もんも日本は恥辱
なりとて軍を発し明の水軍を順天の海口は破る是を
以て順天圍を解も行長等城を出て帰朝を得あり此諸
事皆義弘は大功なり帰朝の後家康公立大老等相議し

を日本に軍兵差なく帰朝を得しを専義弘の功かりと
て廻り薩摩國出水郡等の五萬石を復し與へらる朝鮮
渡海に諸將功ある人多くありしに獨此賞ありしを義弘
大功拔群なりしを思ふ爾し明人著述の諸書は日本諸
將の勝劣を論し多る中は將畧の卓越せるを擧しを義
弘と加藤清正とかり清正は明人著述に平壤録は清正
於尚中尤強悍嚴厲有謀云々皇明記は清正才能比行長
勝數倍とあり義弘を平壤録は中路倭將薩摩州義弘素
號狡悍と見え（中路とは此時清正は蔚山に據り此を東路と比行長を順天に據る此を西路とに義弘は泗川に據る此を中路とも）又中路義弘勢極狡黠と記せり明史及
び明史記事本末等の内は薩摩州兵剽悍称勁敵と標
せり明史に内は日本諸將の才能を論せしは是のみは
て他は及ハ次即ち義弘將畧卓越に美名唐土は振ひ其
勁敵と称せるはて明人に畏るる所し亦夜叉石
曼子と云ひしも是は由てかりうかに威德ありしうへ
は此怙佐治所の如き平地に第は安居して儉素に行ひ
倹かし益其德華の内は蘊畜ありしを見るは足きり

古怙佐屋敷跡　義弘治所の西北は隣りて皇山仲次陶工
をなせし形かり世は古怙佐屋敷と云ふ（古怙佐に関下天は見也）仲
次も素朝鮮人はて金海と云ふ（姓は金氏海は其名）世々皇山とい

へる所に住居して陶工を業とし義弘征韓の役に帰化を文禄四年彼地の唐島より帰朝の時金海其家人を携へ義弘に従て鹿児島に来るに船市来神之川に着し彼地に寓居を其後栗野に於て始て瓷器を製造を義弘いあく是を賞し即ち皇山仲次と名付佩刀大小二口及び時服を與へて士班に列かる是年の冬義弘栗野より帖佐に移を皇山を従従次於是宅地及び細工所竈屋等を造立し仲次に與ふ即ち此地かをかくて朝鮮傳法の茶器等種々の瓷器を製作し官用に備ふ其功を賞し禄十五石を與へ親ら細工所に至を口命して瓷器を造らし

しめ其能く成るに至るには自判を記して焼しめ常に愛翫を世に所謂薩摩古帖佐是かり又命しあ高城元左衛門（古左衛門も帰化の朝鮮人なり）と共に上方に遣し瀬戸陶の法をを傳授せしむ元五年に至して還を茶入水指等種々の器を製に時に又銀若干を與へて褒賞に因あ其賜銀を以て田禄を賈ひ家頗る富饒に及ぶを加くて慶長十二年の冬義弘加治木に移を し時仲次又従ひて移る義弘卒去の後息家久鹿児島に移し宅地を堅野に定め家業怠らに時に田原某の元祖申氏（申氏ハ申主碩其弟申武信田原万助と称を共に朝鮮田原の人）を帰化しあ鹿児島に在を しを仲次是をを薦挙

して俱に其業を聞きて今鹿児島竪野陶家の始祖かり
義弘判手此文字は萬字を用ふ其伐詳からに一説は此
萬字甚古雅かる故唐土此古印を携へあるを取て陶器
此判用まかせしものならむ又一説ハ明此萬暦年中
は製もるものなきも萬暦年製此四字の内萬此一字を
用ひあらんとも傳へ云ふ竪野其宅地乃後山ハ周り岡
ふ續き漸く高し其地秋瀬戸此如く入口ハ濶さ十間許
其奥ハ次第は細くしあ一は合も左右瀬戸乃上々高さ
二三間かゝ廻し土人此所陶場の址なる由しと云ふ初
此頃仲次高麗より土を携へ來もて陶せし故其磁器特
はよく成もしと且其土を余多地中は埋めお紀しよし
傳説のもして往年高孫星山仲次來あ此宅地の址處々か
もしるとも遂は得さりしとそ

鉈田村

建昌城　平山城の未申の方は當きり一名瓜生野城亦胡
麻ケ城とも云ふ周廻二十町許北ハ崖壁ハあ高さ六十
間許東南ハ皆水田ゆして西ハ山は接し堀切ゆも入水
泉山此半腹より出つ島津豊後季久居城かり享徳年中
島津忠國平山氏を平け其領地を季久は與ふ季久當城
を築き嫡子修理忠廉と是は住（季久文明九年八月卒に）忠廉屢賊

徒と所々に於て戰い終に是を敗て成名を振ふ時に日向都於郡城主伊東氏屢寇をなす故に十一代島津忠昌賀勇士人を撰び日向を鎮めむと次時に忠廉其撰に應し文明十八年忠廉に飫肥福島を與ふ爰に於て忠廉十月帖佐を去て飫肥に移るかくて遂に年を經て関ヶ原の乱後加藤清正先鋒ふて徳川家の軍兵薩戸に向ふに し說ひて衆心安らぐ是に因て義弘蒲生本城及び帖佐瓜野城を修覆して守禦に備ひもしかとも虚說ふして止ぬ

萩峰城　城蹟今陸田となるも五代島津貞久に時島山直顯の執事野元藤次季安居城なり時に島津に將本田信濃溝邊城を守れかくて島津氏久當城を攻め島山直顯ハ溝邊城を囲む二城危事且夕に迫り國府正宮に社人和を直顯に進む因て直顯氏久と和を約し共に圍を解くかくて猶直顯加治木土器園に屯す氏久夜精兵を以て是を破る直顯日向の國志布志に走る萩峯城或ハ萩原城とも旧記に見えあり

平松神社　天禄元年壬辰七月十八日島津左衛門尉久入道晴蓑自盡に地なりの故に十六代義久慶長四年己亥に春一寺を創建して心岳寺と稱せしを寺に廢し為明

治三庚午の年其地に一社を建立し平松神社と號しあ
歳久此靈魂を祭る初め文禄元年朝鮮の役に太閤秀吉
公肥前名護屋より陣を義久同所より帰り六月島津豪の部
將梅北宮内左衛門國兼朝鮮より起くとて義弘より後きを
進発し肥前の國に至り五月十四日肥後佐敷
城を攻て是を陷き又兵を遣しあ八代城を攻め松波瀬
を焼き小川城を攻むかくて國兼佐敷城に據る既にし
て佐敷の人境善左衛門等婦人をして酒を進め國兼醉
るを窺ひ是を殺す秀吉公浅野彈正長政をして國兼を
討しむ長政至る時ハ國兼既に死しあり初め秀吉公國

兼の叛を聞て義久に命なきと思ひ罪を加んとに時に
家康公是を諫て止む既にしあ義久を國に帰し細川幽
齋をして共に梅北の餘黨伐平治次七月義久鹿児島に
帰る是より先き秀吉公薩摩より旧軍に時水引恭平寺
を発して島津歳久に管下祁答院に宿せむとに歳久許
さず公怒て山崎を經て鶴田に宿す歳久人を発して難
所を導うしむ又飛箭肩輿に前に及ふ歳久の所為とも
此時歳久病を謁せる事能ハず本田掃部をして館事を
司らしむ明日公曾木に至る時に小姓金屋風に西伐剥
戎取る掃部其狼藉を怒る太閤是を聞小姓の指伐斬を

面に添へて還さしむ（歳久此時の文言之城北卷より詳かり）太閤怒甚より堪
ずといへども和議既に成きるを因て怒を押へて止む
時に歳久梅北の黨かまと告る者有り太閤大に怒甚同
十日義久に書を送る其趣歳久此罪を數へ速に首を斬
まて来き然らずんハ汝の國城屠ふしとなり義久止事
を得ず歳久を祁答院より召ふ歳久鹿児島に至る陰に
其狀を察し前夜舟より服元より起く群臣義久に告て曰
今歳久を縱つて帰らしむるハ虎を山に放つかりと即
ち町田出羽久倍をして兵を督し是を逐ハしめ入其帰
路を絶つ歳久是を聞免れ得さるを知て廻り瀧今水に

宿る家臣戰ハむと欲歳久是を止めて君父の命皆く面
うらに吾死を免れ時かまと云ふ家臣是を聽ずに戰て
死する者數十人なり是に於て將士進て歳久に逼る
歳久是に向ひて吾疾病に羅て手足痿痺して自殺する
事能ハず汝等我首を斬きと云ふ皆俯伏して近付次原
田甚次遂に是を斬る實に是月十八日かり初め義久歳
久に瀧今水に據るを聞白濱次郎左衛門重治を遣し殿
下命して爾に死を典ふ宜しく早く自ら決を免し今險
に據て拒き守ると聞く是を家臣に形爲からむ誤る莫
勿きと云ハしむ重治馳て瀧今水に詣れ歳久既に死

せり傍に臨終に書のり畧して誌さ次書に奥に哥のり
「晴蓑めの玉のいのりを人問はいいさ白雲の未とこし
へむ」晴蓑ハ嚴久の道号かりかくて此哥を首に添て太
閤に出しを秘々大に悼こて義久を賞して祁答院を與
へらる嚴久ハ貴久に第三子かり天文六年伊作城に生
き終年五十六歳かり天性沈深かして智謀のり雄毅に
して善く断し屢武功のり是に至て歎惜せさるハかし
義久潛に吉田美作に命して厚く神主を祭る又嚴久の
後臣に遺骨かりとて當地古樟木に下に埋て是を取て
他處に置ハ猶原所に還るとこふ此地後に山に倚て

前々海に臨こ古木梢を天へ怪石諸所に時ち通路ハ山
下にのりて海に沿ふ實に塵外に幽境かり嚴久の没後
威靈特に著しるく敬畏せる者なし常に參詣に徒多く
其命日に至て々海陸共に詣人殊更かり

朝鮮王子事跡　市來盧白曰伊集院幸侃朝鮮に役に七八
歳の童子を生捕来て僕とに後帖依天福寺に在て僧
とならんと次時に朝鮮の王子薩摩に在りと聞朝鮮人
来て頻に返さむ事を乞い國中を求むれとも得ず於
是天福寺に童子を視せしに是かりとて朝鮮人九幷し
て即ち乞去りしと云ふ新井白石曰天禄元年日本に兵

朝鮮に東道を陷き五月王城に入て八道悉く亂れ朝鮮
國明國に急を告しかば明より援軍を出し合戰度々に
及ひ一旦和議に及といへとも遂に破れて再ひ軍起て
兵連る事七年かして慶長四年八月太閤薨御し給ひ日
本の兵悉く軍を歸す同五年關ヶ原の戰ひ終て後六十
六國皆家康公に歸服しぬ六年安南東捕塞呂宋等の國
々始て入貢す此年宗對馬守義智其家人柳川豊前守調
信等に被仰付日本朝鮮和議の事を講せらる是より先
對馬の使朝鮮に至る已に三度皆々明國鎮將の爲に生
捕きかへる事を得ず此事義智調信等蒙仰し後差遣次

處に使始て彼樂業府に復書を得て歸きり初め慶長三
年戊戌より此年辛丑に至る迄對馬の使朝鮮に至る度
度々に及ふ初度に使柿七太夫第二度に使吉嗣左近等
三度柚谷彌介是等皆明に鎮將生捕て北京に送り献
也第四度に使石田甚左衛門始て彼國の報書を得て歸
る但此書に彼樂業府使調信移せしと見え多り爰に於
て井半彌六左衛門を使として先に對馬の卒彼國に
生捕し處の男女を送り返て朝鮮始て其使を釜山に接
對し為對馬守に復書を義智其使を參らせしに家康公
御前に召し事に子細を聞召て照給ハ是を飯さる是則

第五度の使かて明朝鮮の書翰は橘智正と称するを此彌
云左衛門の尉かを是等此事とを朝鮮の書對馬此人申
傳ふる處かを詳からさる事なり七年此春對馬乃使（使ハ）
則橘智正朝鮮に至る彼國此使金継信孫文或等對馬に來る
義智等又彼國の虜を送を帰次此時薩摩の兵此爲に捕
ハ被し金光と云ふ者此送返をより朝鮮の君臣我國
の事を能々尋問て和議終に成あを金光を其國王の親
戚かりと聞之此九年此秋孫文或再ひ其國此僧松雲と
共に使として義智の遣せし使（橘智正）と同しく對馬に來
る十年此春義智等孫文或松雲を召連て伏見城に參る

朝鮮の使を御前に召出さ被其後本田正信兼光長光等
を以て西國修好此事を被仰出我國に虜なりし朝鮮此
男女一千三百余人と共に其國に帰る（此時橘智正と其使と同しく朝鮮に至り）
十一年此秋朝鮮國より對馬守に書を贈て先我國
の御書を可賜由を望申に依て此年此冬家康公彼國に
國書此遣さる十二年此春朝鮮の通信使始て來きり閏
四月江戸に至る家光卿に其國王此書信を獻をを五月
駿府に至て家康公に信物を獻る爰に於て日本朝鮮修
好此事成をぬ云々（以下文長う多端を略を）今按をるに市来虚白の
天福寺に居さる童子を朝鮮王子と記しあるを白石の

云へる金光かてやのらんさてを白石の記を処朝鮮王
北親戚金光とのをて王子ゐ非す両説何きの正しのら
ん又別ゐ同名北者のをしの詳からをかくて慶長二年
日本軍兵帰朝の後と再ひ兵を発し朝鮮を伐む事を恐
従明國北軍兵多年朝鮮釜山浦ゐ鎮戍す此事明史等ゐ
詳かり家康公れ命かて和議を講を面北為ゐ度々對馬
より使を遣をと云へとを皆捕ゐなりて和議ならさを
しゐ疑て北夏かりしを朝鮮の君臣始て金光の説を詳
ゐ聞其實を知をて遂ゐ和議整へをしなりゐを
怡佐北船戦　元亀二年肝属省釣等兵船を浮へて鹿児島
を襲ふ陸ゐ上ふ事を得を船を轉して花倉美船（鹿児島の海吉野村迄也）及ひ櫻島北松浦西道等を侵掠を怡佐地頭平田新
三郎昌宗船を発して救んとして敵と大崎（當邑服元村北海辺）ゐ
遇ふ退て瀧ケ水ゐ據て防き戦ふ敵兵力ら及を次却き
走る

三十町村

新城　東北平山城北山に續きて其間ゐ堀切のを西南ハ
田野ゐ臨めり周廻十町許高二町許■川上筑前忠直居
城なり事跡平山城北条に詳なり

古城　中津野村ふのり城主及ひ由緒詳からに

茶臼城　土人の口碑ハ正平十二年五月二日久木崎久春
城兵と合戦ありしと云ふ事實詳からず

物産

土石　假山石
器用　諸竹箆　蓆薦　筵蓆　山茶油
飲食　煙草
藥種　桂木　枳殼　金銀花
蔬菜　西瓜　海苔　水苔
果實　柿　梨
樹木　桐　樟　櫧　椎

飛禽　鶉
走獸　野猪　鹿　猿
鱗介　鰺　鯖　雜魚　火打魚（方言）　華臍魚　棘鬣魚
鮡　鯔　蛤　昊諸種　方頭魚　梭魚　烏賊　章魚
鰻鱺　鮒　香魚

同郡

重富郷

舊名脇元と云へり元文二年二十二代島津継豊此時佐郷の内三村及び鹿児島郡吉田郷佐多浦村の内を割

脇元

て脇元と併せて一郷とし其家周防忠紀より世〻食邑となさしむ忠紀祖先は高祖忠久此第二子を周防忠綱と云ふ兼久中忠久越前國地頭職を任せ忠綱守護代となせ彼國に任せ故に越前島津家と号し其子忠行播磨國揖保の地頭職に任し其地に移り子孫兼襲す第十九代左近忠長天文三年播磨國朝日山に戦死し其家絶し

周を周防忠紀をして其豪を絶しむ一説ハ此時旧名を改め重富と号に重富ハ越前國北地名なり其きを取て此ハ名付くと云ふ建久八年圖田帳ハ大隅國重富三十三丁云々とあきハ其以前よりの名なるを思ふ

西し鹿児島縣廳より北四里ハ在て西南ハ鹿児島ハ隣て東々海ハ對し南ハ吉田に接し北蒲生東北帖佐ハ接す周廻六里二十八町四十七間半村落四 平松村 永津村 春花村 鰐田村 浦一 脇元 浦 高三千七百五十六石余士族千四百四人 男七百四十五人 女六百五十九人 卒百九十五人 男百七人 女八十八人 平民二千百十八人 男千百二十三人 女九百九十五人 人員総計三千七百十七人戸数九百十六軒

平松村

白銀山 シロカネヤマ 此山當村北西南ハ當て群巒複岡甚險峻ハして吉田蒲生の群山ハ接連し山中ハ薩ア大隅往来ハ大道通て

脇元村

白銀坂 白銀山中ハ始り薩摩大隅ハ往還ハて鹿児島ハ り ハ降て ハして一里ハ近し 坂の下より坂中吉田境まて九二十四町二十四間重 冨の内也 坂中に薩隅の境木あり左右岡巒廻合して其間ハ大道通て水泉縱横ハ流き石路險阻ハして行人更ハ心

を安むる事能ハも鹿児島近地の險かるハ是を以て第一とせり坂北上より望めハ大偶北遠景一望ゟ歸次中ふも櫻島海中ゟ秀拔して盆山北加く其風景北すへき此し此坂種々北妖怪所る中ゟ棺の通行もる夜を堅く禁に是を侵も時々妖魅北爲ゟ棺中空しく成ると云ふ

脇元濱　白銀坂の下海濱を云ふ人家數十軒所り此海頗る湾曲所りて右ハ青嶂相連も左も沿海一帶平砂ゟし て風景愛も面し此濱ゟ鹿児島往來北舟船所乾故ゟ通行北革白銀坂の難所を辟け此濱より発船もる者多ら次

布引瀑布　水源ハ白銀北山中より出つ其幅五六尺ゟし て高さ六丈許左右ハ巖壁なり邑人呼て布引と云ふ此下流を東川と号も渡瀬川ゟ會して脇元浦北海ゟ入る

岩釼神社

祭神　大己貴命　保食命（神体木像二軀各一尺二寸九分也）

當村岩釼城址北山下ゟ所ゟ也天文十一年棟札ゟ大檀那平重嗣地頭重清と所り創建詳から次社説に天文二十三年島津貴久岩釼を攻む十月二日田布施金峯山北產主某岩釼社の神体を奉し白銀坂乃陣営ゟ到る貴久勝利あらは舟年祭祀ゟ神舞を報賽せむとの五願所ゟし

より其夜半渋谷の兵岩釼城に進き去る翌三日貴久城より
入り岩釼社小神体を遷し是故に當社を軍神と称
し特に尊崇の事を正祭ありて神舞の事ありて又島津義弘平松
へ在城社時當社へ屢参詣の事ありて神舞を供し且祭田を
寄附のありしと云ふ今日至る正祭九月十九日十一月
十五日猶神舞を修し當郷建置社後延享二年再興の棟
札の當邑宗社かり

諏方神社

祭神　建御名方神　事代主命　神体鏡鉛より天文二十四年と記す

形藏社棟札に弘治二年丙辰六月廿九日地頭三原遠江

重秋造五諏方社一宇云々とゝり祭祀七月十七日

稲年禮神社

祭神　猿田彦大神　正祭十一月初酉日　創建由緒詳

からず

岩鈒城　此城跡白銀の山中ゆゑ西北より東の三面ハ皆

懸崖絶壁高さ八十間餘ゆゑ南北一面ハ山ゆ掘しゝ堀

切の跡ゆり山上平地上下二段ゆり上段周廻三百九拾

六間下段三百四十六間余ゆゑ天險ゆり天文年中渋谷

り一族祁若院良重城主たり同二十三年蒲生の城主蒲

生範清守護方ゆ反し渋谷一族及び菱刈相良ゆ共し

て加治木北城主肝属兼盛と屢戰ふ同年八月範清又菱刈祁答院北両氏と兵を合せ加治木の城を攻む城中大ゐ苦む貴久諸軍を將い帖佐の敵を破り加治木を救ふ初め貴久兼盛ら急を聞相議して曰先つ帖佐（今の重富ふり）を伐ハ敵軍加治木を棄て來り救む兼盛必ず後より擊ハ敵軍不戰して敗きんとて兵を分て吉田城を守らせ十二日島津義久將集ま軍し（將集ハ地名ゐて岩剱城北西南ふり）進て日當北良（日當北良地名將集の南にあり）小屯を貴久も北營ゐ入り富剱城を攻んとに梅北宮内左衛門國兼宅間典八左衛門兵を領して祁答院良重ら兵と白銀坂ゐ戰ふ義久義弘及ひ島津左衛門歳久日當北良を発し兵を會して攻め戰ふ敵軍敗走せかくて島津左兵衛尉久（貴久季弟）をして將集を守らせ島津右馬忠將（貴久弟）をして帖佐蒲生の敵を伐しむ忠將岩野原（加治木にあり）ゐ戰ふ十四日忠將又戰艦五艘を発して岩剱の城下脇元城攻む鬼塚吉内左衛門黒木七兵衛郷導多り十五日貴久將集北營ま至り近邊の山を燒しむ十六日鬼塚黒木北両人山ま登りて城を覘ふ城中是を知り其帰路を絶つ両人遂ゐ戰没せ十七日義弘兵を引て白銀坂に屯に十八日忠將兵船五十餘艘に乗して脇元ま抵り義弘小會せ廿日義弘兵を脇元ゐ伏し

歩卒を遣して城下北人家を焼かし免又一軍を遣して
脇元より至て稲を刈らしむ城兵是を追ふ伏兵起て大戦
ゆ是を敗る此日島津忠良日當比良及び狩集より來て軍
事を指揮せ廿一日白銀坂陣営北兵士脇元より至て船指
艘を奪ふ廿二日敵軍三百餘人彼の焼址（先より貴久の所焼也）より登
て壘壁をなし廿四日忠良計策を残して鹿児島より帰る
翌日貴久義久と共に蒲生北軍を星原に敗る十月朔日
島津尚久貴久の命を受け其夜狩集の兵を移して岩剱
北城下に屯せ二日義久先つ士卒を遣し西門を攻め其
外郭を焚く尚久城下ゆ逼る蒲生北兵二千余人来て救
ひ城兵亦出撃せ迎へ撃て是を破せ城主祁答院良重の
子又二郎重經西俣武蔵盛家等を斬て其餘斬首五十余
級なり義久城下に至て良重を諭して降らしむ因て人
を遣し是を促せ事屢かり敵猶下らに是ゆ因て貴久軍
士に命し圍を解き軍を退く城兵其夜城を棄て走る三
日貴久諸將と共に城に入る群臣皆賀せ此に於て義弘
をして當城を守らせ貴久鹿児島に還る此勝利に因て
加治木の圍を尤解せ

平松城　岩剱の城下にあり周廻三百七十八間石垣遺て
て高さ八尺計かり天文二十三年十月十九日義弘岩剱

城は移されし後山上絶險なるを故に當城を築き平日は
是に住居せしと云ふ其後関ヶ原に役より還りし頃と
須臾此に居住ありしとそ
將集陣營　天文二十三年義久の陣營なり岩剱城より西
南五町許かり
日當比良陣營　天文二十三年貴久の陣營かり將集に南
四五町ゆ〻今深山かり事ハ岩剱城に明なり
惣神鹿倉山　岩剱城の西五六町ゆ〻當邑第一の高山か
り貴久岩剱城を攻し時惣勢の陣營なり山中鹿及ひ野
猪多し

諏方ヶ城　帖佐郷建昌城より西六町許に有り南北水田
に臨ミ東ハ村里西原野に接して諸所に堀切有り城主
詳から次

船津村

上九王神社
奉祀一座　船王神
永禄九年乙丑十一月造營に棟札を藏む祭日十一月中
酉日なり
下九王神社
奉祀一座　船王神

寛延二年十一月再興ス棟札あり此上下九王の二社ハ
弘安年中帖佐八幡宮ヨリ神霊を奉下せし時着船の所か
る故ニ地名を船津村と称し両社を創建せしと云ふ此
村の鎮守かり帖佐八幡神社ヨリ条と参考を為し

佐多之浦村

渡瀬川　一名平川ともいふ水上は鹿児島郡吉田郷ヨリ山
中より出つ佐多之浦村平松村を過きて脇元ヨリ海に入
る満潮ヨリ時々舟渡しして常ハ歩渡りかを川口舟船繋
泊ス

高姫神社

祭神　高姫命

寛文六年造営ヨリ棟札あり同村觸田山ヨリ半腹に平坦の
地ありて其所に鎮座かり前々数百丈ヨリ谷かを児ヶ潭
と云ふ深淵ニ臨み後ハ深山かり往古童子此淵ニ身を
投て死ある故に名を得ありと也山上より潭を臨めは
皆人眼眩く社頭に詣るニ為ス懸崖ヨリ西北三町許に羊腸
ヨリ路ありと也

物産

走獣　鹿　野猪

鱗介　石首魚　鰆　鰺　鯉

章魚　鮒　溪鰮

正八幡若宮

同郡

蒲生郷 後紀延暦廿三年三月庚子太宰府言大隅国桑原郡蒲生駅與薩摩国薩摩郡田尾駅相去遠遠通送艱苦伏望置駅於薩摩郡櫟野村以息民苦許之 延喜式小大隅国桑原郡蒲生駅云々 建久八年大隅国図田帳小蒲生院百十丁九段半云々今為良郡

鹿児島縣廳を距る事九里余東山田南重富東南怙佐西吉田西北薗牟田大村小搖を周廻十四里十三町五十八間村落九 西浦村 白男村 上久徳村 下久徳村 久未村 重留村 北村 米丸村 漆村 高三千二百二十二石餘士族三千三百九十六人 男千七百九十二人女千六百四人 卒七十人 男三十四人 女三十六人 平民二千四百二十人 男千二百五十

五人少千百
六十五人　人員總計五千八百八十六人戸數千三百六
十二軒

真黒岳　黒岩岳　此両岳當邑第一北高岳ゟ白男村ゟ
屬ス

前川　水源入來邑永野村當邑西浦村の両所より出つ白
男村ゟ至て両川相會し久徳村ゟ至て又後川ゟ會し
後川　水源二ヶ所一つハ山田邑木津志村一ハ當邑漆村
より出つ来丸村ゟ至て両川相會し久徳村ゟ至て又前川に
會し怡佐重冨北境を過き重冨北海ゟ入る

中山瀑布　西浦村ゟ在て高さ十六尋濶さ十尋餘一條の
飛泉ふり

廣瀑布　漆村ゟあり高さ十二尋濶さ九尋餘二條に分き
二段ゟ落つ

左簸瀑布　高さ凡十二尋濶さ四尋許二段ゟ落つ白男村
ゟ屬ス

青色野瀑布　久徳村ゟあり高さ凡三拾尋濶さ二尋餘以
上の四瀑下流前川後川ゟ會し
久徳村

若宮八幡神社
奉祀三座　應神天皇　仲哀天皇　神功皇后

正祭六月二十九日或ハ晦日かり社記云鳥羽院ヶ御世
上總介藤原舜清大偶國下大偶ヶ下向し後蒲生ヶ移ヲ
保安四年癸卯閏二月廿一日今ヶ地ヶ創建次云々舜清
ハ豊前國宇佐郡の人ヶ真光坊と云ふ舜清の事ハ猶古城の條ヶ合せ考ふ
ヲ舜清を生に舜清初め大偶垂水ヶ來ヲ後當邑本城ヶ
移居して蒲生上總と号次同を當社を建立を舜清の後
裔蒲生範清島津貴久ヶ背きて蒲生氏敗亡ヶ後同義久
同義弘共ヶ當社を敬礼し社殿再興ヶり大幡八流を寄
附し新に幣表を建て正八幡若宮五宇ヶ額文字銅ヶて製を入背に
建立鳥居大願主島津兵庫入道藤原義弘元和四年戊午
當地頭本田伊豆守當主權大僧都浮盧云々とヶり
を掲ヶ一層の威德を増を爾来屢修造ヶ上梁文ヶり闔
郷の宗社ヶて太刀甲冑其外什品若干宝殿ヶ藏む

奉納物

大幡八流　永禄元年島津義久寄附ヶ銘ヶり　刀二
振一ハ天國の銘ヶり　兼一頭　太刀六腰無銘　中
刀一腰無銘　短刀一腰同　鏃一本　征矢十一本
箙二腰　鐔大小三　此外什品或ハ田地寄附の古文
書類數通ありて昔ハ社領多ありしと也
末社

四所宮祭神　仁德天皇　宇治皇子　宇禮姫　久禮
姫　武内社　武内宿称　早風社　火闌降命　天社
天神七代　國社　地神五代　以上六社本社北東
傍なり　大王社　太王命本社の後なり　素
畑両社 木像四体　備前　大多羅知女 木像　篭所　聖
德大子　御供所　聖殿と呼ふ　以上本社の西に
あり　鐘楼　本社の前西傍なり嘉慶二年北銘有
此末社の中に宇禮姫及び久禮姫の神名鹿児島神社
北末社なりと見えて記もかるべき事彼巻に辨せり又
祭神詳からざるとあり又疑ハしきもあるべきと是を訂
さんに拠おもはゝ悉く社傳北俗に虫せり

北村

楠田神社　祭神且創建年■月詳からず往古總社かりし
とゝふ例祭十一月十八日　山之神祠　白男村に一
社西浦村に五社都て六社奉祀大山祇命かり島津義弘
建立かりといふ

久末村

蒲生城　或ハ本城とも呼ふ昔時蒲生氏累代北居城也蒲
生系圖等を按するに其先大職冠鎌足公の末裔從三位
藤原通基北男教清豊前國宇佐郡に住も其子舞清保安

四年大隅國より来り乘水の城主あり同年蒲生及び吉田を領し此城より移り上總と称し蒲生を家号とし子孫世々居城とし島津貴久北時十八世蒲生範清叛して當城に據る諸旧記を考ふるに（諸書異同なれども大意同し）弘治二年十月貴久諸軍分督し蒲生を攻む島津義久島津義弘及び島津右馬忠將（貴久の弟）島津左兵衛尚久（貴久の季弟也）是より從い松坂の墨を圍む（是より先き同年三月貴久既に松坂を攻む此事次の巻にいへり）渋谷良重来り援ふ貴久軍を分ちて是を破り松坂を拔き七曲り馬丸等に陣営を布き當城を攻むと寸菱刈左馬重豊大軍を率い當郷北村の境に屯して蒲生を助く貴久曰範清嘯に據り今此を攻ふも重豊の大兵我後へを襲ハむ又速に拔く能を得ざれ諸方援兵集り来て進退危からむ因て戦ハずして日を経ハ重豊の軍労り怠し其虚に乘じて重豊分破り蒲生を伐ハ一挙して両敵を滅さむとて敢て動かに両軍相持して翌年四月に至る時に貴久衆と議して曰今や重豊久しく爰に在て鋭氣漸く衰ふ急に撃ハ破らむこと掌に仍りとて十五日諸軍を指揮して重豊の營に向ふ重豊高山に營して我軍分道下し頻に矢砲を雨して是を防く味方死傷多く先隊猶豫を是を見て義弘単騎かして先登し重豊の士楠原某

膂力絶倫刀を振て義弘を名謂もるを義弘一刀を斬て
捨つ相續て村田越前三原右京奮戰も衆是に激して爭
い進む其勢い烈風迅雷に如し忽ち敵數百人を斬る重
豊邊りしを路かく終に自刄に是を於て直を軍を廻し
當城を通る敵軍大に恐怖し範清の臣西俣出羽密を脅
をもふ範清重豊り援兵敗き衆に異心ありるを察て蒲生
に保ちうあ紀を慮も世日夜を奔し城を火を放て祁答
院を逐き奔る因て兵を收め比志島美濃を地頭とも其
後貴久永禄年中當城に鬼門を方を密京の清利を建立して
祈願所とも又本丸より午未に方を義弘取添地と云り

り口碑を関ヶ原に役畢も義弘帰陣の後関東の軍勢薩
ア を向ふとの聞えありて義弘要害の地を撰て修築せ
しと云ふ本丸二丸東城倉城岩城に名或ハ追手口閨閣
等の旧跡今に傳も總名を龍ヶ城と号も周圍二里三町
余四方断崖峻谷山林深く秘泉多くして守るを安く攻
るに難し實を天造の堅城かり

荒平　七曲とも唱ふ里俗を弘治年中蒲生攻に時義弘初
め本城より拾町許向城を陣も敵の城遠きを因て俄を
令して此所を轉きりと云ふ本城の未に方七町余をし
彼の取添の内なり

尼ヶ城　久徳村に在り或ハ新搭と云ふ本城の東にて
其の間拾町許り貴久蒲生攻の時中軍此陣営かり又
此所の原野に連り城ヶ崎と云ふ所有り是も當時此営
址也

北村城　即ち北村に在り一名矢筈城と云ひ蒲生の一
族北村某代々居城かり（按るに北村ハ蒲生氏五世清直の第二の男清則を北村二郎と号たるし）蒲生範清落城の時北村伯耆清康城主にて
共に落去る

菱刈寨　北村に在り故に土俗北村陣と呼ふ弘治二年菱
刈左馬重豊陣営なり菱刈氏戦亡此頭塚辰巳の方一町
余に有り

漆村

切手園付遠江墨並射場

漆村に在り切手園ハ弘治二年蒲生の亂に義弘の陣営
かり又遠江墨ハ是より子の方七町許りて渋谷ヶ将梢
遠江り営址かりと云ふ蒲生範清落城の後義弘命して
士五十人を當村に移し射場を築て常に射術を練習せ
しむといふ

茅子丸播磨墓

白男村に在り弘治元年島津貴久北村の城を攻む時に

敵兵四方に起り貴久危し肥股北臣茅子丸播磨馬を飛
もして駐来り縦横に當り遂に戰死す其間に貴久危き
を免るる墓ハ同村岩戸山にありて茅子丸播磨と鉛を
今に其忠死を感賞す戰死の形より己午の方六町許か
り同村の農民十兵衛と云へる者の家に播磨の太刀を
藏めて其子孫代々祭祀を主る

物産

器用　紙
薬品　枳殻　山盃子　茯苓
鱗介　亀　香魚　鰻

同郡

山田郷

鹿児島を距る事丑寅の方六里に在り東南加治木南帖
佐西蒲生北溝辺に接し周廻十二里十一町五十六間村
落六（木津志村　上名村　下名村　大山村　北山村　鹿川村）高四千九百七十石士
族千二百三十一人（男六百五十人　女五百八十一人）卒七十九人（男四十　二人女
三十七人）平民千九百三十三人（男千十三人女九百二十五人）人員總計三千
二百四十三人戸數六百三十九軒
鉢の峯　上名村に属し連山なく原野に獨立し高六十間
許皆人奇峯と称す

山田川　水源伊佐郡黒木郷より発し當郷上名下名の両村及び大山村を経て帖佐郷三十町村上別府川に會流

上名村

黒島神社　祭神及び創建の年月分明からず　木坐像五体　社傳小往古鈴木三郎と云いろ者建立せしと云ふ社殿ハ山の半腹より在りて拝殿ハ山下より其間坂を躋る凡一町余なり古来婦人の参詣を禁ず社と拝殿と此間を澗水流る女人ハ爰を限とし初め山巓より鎮坐ありしを至永六年己丑六月朔日大雨よりて山崩き神社及び諸旧記

流失して神體獨山中に留まり土人即ち今の地に社殿を造營し當邑に總鎮護として土民に尊崇他に異なり正祭正月朔日なり　寶物　刀七腰其中二腰八波平安玉作黒島大羽神永禄七年甲子八月吉日額王藤原朝臣實行敬白の銘あり　鈷一口　鎧一領　共に宝殿に秘藏せり

玉城山　同村にあり俗に鎮西八郎爲朝當國に履歷せしといまゝ確說を聞かずと云へども諸說に牝を按ずるに爲朝幼より勇を特て人に誇り十三歳にして父爲義其論に逆ふ爲朝豊後に居て鎮西八郎と号し自ら九國の總追補使と

称を肥後國阿曽平四郎忠景の子三郎忠國の婿と成を
忠國を郷導とし築紫を狗年十五より至り九國を掠略を
保元物語に拠る杉原本に忠景を高景に作る又異本に
は忠國を載せを直に平四郎の婿と次田記に阿曽忠景
は藤摩國押領使阿多平四郎權頭平忠景かりこりり阿
多を阿曽と誤をしより長に肥後國と記しるむ阿多平
四郎は東鑑に見えて薩
ア国阿多の領主なり
かく九州を攻撃し威を振い又
平忠景は爲朝に場にしてさる由緒を以て從を以上の説
捨難し 鈔巻には保元合戰に爲朝落て九州田根と云所
に赤りを捕むれしと書せをされは爲朝二度迄九州
しなり 此玉城山は國禪福寺と云い寺にて日照東本
大居士と銘せる木主を安し爲朝に灵位とせをさるは
寺傳に往古の住持一夜不測の灵夢を感を一奇人忽然
として来を告て曰吾は鎮西八郎爲朝かり法諡を日照
東本と号に此寺に我位牌を安置せよと云記を去る是
は国を此に如しと云ふ 故事因縁集と云書に阿波の國慶長七年夏稲田治理亮屋鋪の隣家の婦女に記を吾は徳島に魚名の神と云小社にを鎮西八郎爲朝なりとを顕狂せし夏を記せを是と事相類せり
松坂城 木津志村に阿り蒲生範清の將中村某父子是を
守る弘治二年三月範清反を島津貴久兵を発し先當城
を圍を城門を破ると云へと城兵能く防を故に兵の
損せん事状憑を軍を納め此年十月貴久義弘再び蒲生
を退治を忠將尚久等是に從い當城を攻む蒲生範清渋

谷良重來り援ふ貴久兵を分ち奪戰して是を破る兩家の兵合せて百余人を斬る範清良重敗走に北る依追ふ事半途よりして軍を班し兵を會して當城を攻む城忽ち陷るとこふ

野神牧址　上名村に屬を三代實録貞觀二年十月八日廢大隅國吉多野神二牧縁馬多蕃息害百姓作業也と所り野神の牧址かり天和の比まで猶牧所とて北山牧と号し島津綱貴中西長門右衛門に與へしりとも馬の性人に馴さるを以て廢して今なし吉多牧ハ是より未の方一里半許に在りて北野といふ

国立公文書館
National Archives of Japan